

# 賈島「棹穿波底月、船壓水中天」の生成と流伝について

長谷部剛

## 一

紀貫之（八六六？～九四五？）『土佐日記』の一月十七日の條に以下のようにある。

十七日、曇れる雲なくなりて曉月夜いとおもしろければ、船を出して漕ぎ行く。この間に雲の上も海の底も同じごとくになむありける。むべも昔の男は「棹は穿つ波の上の月を、船は庄ふ海の中の空を」とは言ひけむ。聞き戯れに聞けるなり。（以下省略）<sup>①</sup>

承平四年（九三四）十二月、土佐国府を出発した紀貫之一行は、翌五年の一月十二日に室津に着く。右に引用した十七日の條はその室津を出発する際のもので、室津沖では雲の上も海の底も、まったく同じように月が輝くさまを見て、日記の作者は聞きかじりに聞いたことのある「棹は穿つ波の上の月を、船は庄ふ海の中の空を」という漢詩の一

聯を詠じる。

この漢詩一聯は、いったい誰の、何という詩から出たものなのか——管見の限りでは、岸本由豆流（一七九一〜一八四六）『土佐日記考證』<sup>②</sup>（文化十二年（一八一五））巻下が、賈島の「棹穿波上月、舟襲海中天」と指摘したのが最も早い。

こ（引用者注「昔の男」）は、賈島を、させるなるべし。例の、おぼめかして、名をばかか、むかしのをのこといへり。

この句（引用者注「棹は穿つ波の上の月を、船は匠ふ海の中の空を」）を、原本、文字にて、棹穿波上月、舟襲海中天と、かきたれど、今は諸本によりて、假名にあらたむ。さて、この聯句は「漁隱叢話」に出たれど、文字、いささか、かはれり。

岸本由豆流『土佐日記考證』は、『土佐日記』の「原本」には「棹穿波上月、舟襲海中天」と書いてあると言うが、現在、そのような「原本」の存在を確認することができない。『土佐日記』の伝本としては、①定家自筆本（前田家尊経閣文庫蔵）<sup>③</sup>、②青谿書屋本、などがあるが、この一聯を、①は「さをはうかへなみのうへの月をふねはをそふうみのうちのそらを」と筆写し、②は「さをはうかつなみのうへのつきをふねはおそふうみのうちのそらを」と筆写している。

『考證』が「文字、いささか、かはれり」と言うように、〔宋〕胡仔『苕溪漁隱叢話』が引用する賈島（七七九〜八

四三<sup>⑤</sup>の詩のテキストは、『土佐日記』の「棹は穿つ波の上の月を、船は圧ふ海の中の空を」とは一致しない。

『茗溪漁隱叢話』前集卷十九「孟東野賈浪仙」

『今是堂手録』云、高麗使過海有詩云、「水鳥浮還沒、山雲斷復連」。時賈島詐爲梢人、聯下句云、「棹穿波底月、船壓水中天」。麗使嘉歎久之、自此不復言詩。<sup>⑥</sup>

『茗溪漁隱叢話』は『今是堂手録』の記述を引用する。——高麗の使者が海を渡って来て詩を作った。それは「水鳥は浮かび還た没し、山雲は斷えて復た連なる」という一聯であった。賈島が木こりに姿をやつして一聯を続けた。それは「棹は穿つ波の底の月を、船は壓（おさ）（おさ）ふ水中の天を」というものであった。高麗の使者は感歎すること久しく、それ以降、詩について口にすることはなかった。

この説話は、〔宋〕魏慶之『詩人玉屑』卷十五「孟東野賈浪仙」にも引用されるので、『土佐日記』の現代の訳注（新・日本古典文学大系〔岩波書店〕、新編日本古典文学全集〔小学館〕、新潮日本古典集成〔新潮社〕など）はすべて『詩人玉屑』を出典とする。しかし、この説話はもとは『今是堂手録』に筆録されるもので、また『茗溪漁隱叢話』の方が『詩人玉屑』よりも成書年代は早いので、『土佐日記』の漢詩「棹は穿つ波の上の月を、船は圧ふ海の中の空を」が右の賈島の一聯であるとするならば、『茗溪漁隱叢話』を出典する方がよろしかろう。なお、『今是堂手録』がいったい如何なる書であったのかは未詳。

この高麗使と賈島との詩の応酬は「過海聯句」として、〔清〕『全唐詩』卷七九一に収められる。しかしながら、『茗

『漁隱叢話』所引『今是堂手録』の「棹穿波底月、船壓水中天」は、実際には賈島が作った詩句とは考えられない。つまり、この説話自体が後世の人が創作したもので、実話でないと判断されるのである。すでに〔明〕胡震亨『唐音統籤』丁籤がこの説話は偽託されたものと断じている。<sup>7)</sup>さらに、陳尚君「從長沙窰盜器題詩看唐詩在唐代下層社會的流行」<sup>8)</sup>は、『君溪漁隱叢話』には『今是堂手録』から三條の詩話が引用され、高麗使・賈島「過海聯句」説話以外の二條が北宋時期の説話であること（＝賈島が在世した唐代ではないこと）、また賈島の説話の内容が荒唐無稽であること——の二点から、この「過海聯句」説話は後世の人によって偽託されたものと述べている。

さらに、『土佐日記』が引用する漢詩は賈島が作った（と偽託される）詩句である」と同定する際の障碍となるのが、両者間の文字の異同である。

『今是堂手録』所引賈島句	棹穿波底月	船壓水中天
『土佐日記』「昔の男のよめる」	棹穿波上月	船壓海中天

この問題について、萩谷朴『土佐日記全注釈』<sup>9)</sup>は以下のように述べる。

○さをはうがつの詩（前文省略）貫之の引いたのは、この賈島の詩句である。底をウへとよむことと、水をウミとよむことだけが違っているが、恐らく年少読者に納得が行きやすいように言い換えたのであろう。すなわち、月の映るのはたしかに水面であつて海底ではないし、棹が月影を串刺しにすることも、水面であつて始めて適切な表現となり、「みづ」というより「うみ」と言った方が、その場によりよく合致するからである。小西『評

解』（引用者注、小西甚一『土佐日記評解』、一九五一年）は、底をウへ、水をウミとよむのが当時の訓みならわしであろうと推測しているが、その例を知らぬ。（以下省略）

萩谷『全注釈』は、貫之が賈島詩の「底」を「ウへ」、「水」を「ウミ」に言い換えたと主張する。筆者は、後者「水」↓「ウミ」について異論はない。その一方、後者「底」↓「ウへ」については、貫之の目にした漢詩のテキストがもともと「棹穿波上月」に作っていたこと、すなわち貫之の言い換えではなかったこと、そして、その漢詩のテキストは賈島の作（と偽託されるもの）ではなかったことを主張する。次節（二）ではその根拠を示したい。

## 二

一九五七年、中国湖南省文物管理委员会および湖南省博物館は、長沙望城县銅官鎮から石渚湖にかけて存在する唐代の窯跡（「長沙窯」）について調査を開始した。一九七四年と一九七八年には、比較的大規模な発掘調査が行われ、二千件近い器物が発掘された。発掘物に基づいて、窯跡の分布や特徴、出土文物や器物の時代区分、器物の文様や裝飾および墨書などについて研究が進められ、一九八〇年の発掘調査までに、出土器物には墨書や題詩二十三首および多少の諺語俗語が書写されていることがわかり、出土器物の形体的特徴や書写された文字の分析から、出土した器物は、①唐初（七世紀）から元和年間（八〇六〜八二〇）までの第一期、②元和年間から大中年間（八四七〜八六〇）までの第二期、③大中年間以降の第三期、に分けることができる<sup>10</sup>。

その後も長沙窯からは多数の磁器が出土した。特に、一九八三年に湖南省博物館と長沙市文物工作隊は長沙窯聯合

発掘小組を組織し大規模調査を行った。一九八三年の出土物のなかで、詩や文字が題されているもの、款識のあるものは二四八件に上った。このなかには「海鳥浮還没」から始まる五言絶句が書写されている磁器二件があり、長沙窯課題組（編）『長沙窯』<sup>11</sup>には圖四三三八および圖版一九二「釉下褐彩『海鳥浮還没』詩文壺」として収録されている。

海鳥浮還没 海鳥は浮かび還た没し

山雲斷更連 山雲は斷えて更に連なる

掉穿波上月 掉（棹）は穿つ 波の上の月を

缸壓水中天 缸かは壓おふ 水中の天を

『長沙窯』によると、この詩文壺が発見された地層（藍岸嘴T3（三）層）からは、「大中」の文字がある碾槽残器も出土しており、この地層から発見された器物は大中年間（八四七〜八六〇）前後のものと考えることができる。大中年間は賈島の死の直後であり、『苕溪漁隱叢話』所引『今是堂手録』が記録するように、高麗使が「海鳥無還没」の一聯を作り、それに続けて賈島が「掉穿波上月」の一聯を作つて応じたという故事が仮に事実だとしても、それが極めて短期間に広大な中国全土に伝播して、賈島の死直後には長沙の地で磁器に書き付けられた、と考えることは難しい。この例だけを見ても、高麗使・賈島「過海聯句」説話は後世の人の偽託と考えられる。

その一方、同じ地層から、「釉下褐彩『二月春豊酒』詩文壺」（『長沙窯』図版一九四）が発見されている。これには「紅泥小火泥」と「能飲一杯無」の二句があり、白居易「問劉十九」詩のなかの詩句を用いたものである。白居易と賈

鳥とは全くの同時代人であり、「袖下褐彩『二月春豊酒』詩文壺」が大中年間前後の出土器物が発見された地層から見つかったということは、白居易の詩が極めて早期に、そして広範囲に伝播していたことを示すものである。「袖下褐彩『海鳥浮還没』詩文壺」が同じ地層から発見されており、賈島の詩も白居易のそれと同じ伝播形態を取っていたと仮定すれば、「海鳥浮還没」詩も高麗使・賈島「過海聯句」そのものと考えられることも不可能ではない。しかし、白居易と賈島では、在世期の評価と伝播の速度や範囲に大きな違いがあり、両者を同一視することはできず、やはり長沙窯「海鳥浮還没」詩は「過海聯句」ではない。賈島詩の伝播については、次節(三)で論じる。

長沙市博物館は一九八三年出土品二件とは別に一件の「海鳥浮還没」詩文壺を収蔵しており、それにも「海鳥浮還没」から始まる五言絶句が書写されている。長沙窯課題組『長沙窯』には圖四六一として収録されているが、これは、右の圖四三八・圖版一九二とは右と文字を少しく異にする。

海鳥浮還没 海鳥は浮かび還た没し

山雲斷便連 山雲は斷えて便ち連なる

掉川波裏月 掉(棹)は川(穿)つ 波の裏の月を

缸壓水中天 缸は壓ふ 水中の天を

模圖四六一の文字で注目すべきは第三句の「川」と「裏」である。まず「川」は、『廣韻』では下平聲二仙韻、反切は「昌緣」であり、「穿」と全く同音である。従って、窯工が「穿」と書くべきところ、誤って同音の「川」と筆写し

た可能性が高い。恐らく、窯工は模圖四六一の磁器を制作する際、この五絶の手本を見ることがなく暗唱しているままに詩本文を書き付けたのであろう。次に「裏」であるが、『廣韻』では上聲六止に属し反切は「良土」。いっぽう、「底」は上聲十一齊で反切は「都禮」であるから、「裏」と「底」は全くの同音ではない。しかしながら、「波裏」の「裏」も「波底」の「底」もともに方位詞（名詞の後に置かれ方向や位置を表す語）であり、さらに、近代漢語では結構助詞「的・底」の代わりに「裏」が用いられることもあるので、「裏」と「底」は互用する場合があると考えてよいであろう。

唐代の長沙窯に三例見られる「海鳥浮還没」詩は、敦煌文献にも見ることができ、P.2662「吉凶書儀」には、「吉凶書儀」のあとに、同書とは関連のない詩歌が筆写されていて、その第四首に以下のようにある。

海鳥無還没山云收（以下文字無し）

「無」は「浮」が誤記されたものであろう。従ってはじめの五字は「海鳥浮還没」と釈読できる。「山云收」の「云」は「雲」の異体字。徐俊「唐五代長沙窯瓷器題詩校證——以敦煌吐魯番寫本詩歌參校」<sup>15</sup>は、「云」と「收」の間に二字の欠字があり、本来は「山云□□收」であったらうと推測している。このP.2662「吉凶書儀」には「大中十三年」（八五九年）との筆写年代が明記されており、「海鳥無還没」詩も同時期の筆写と考えられる。これは賈島の死から数えて十六年後にあたる。長沙窯「釉下褐彩『海鳥浮還没』詩文壺」の例と同じく、高麗使が「海鳥無還没」の一聯を作ったことが仮に事実だとしても、それが極めて短時間で西北の辺境の地、敦煌に伝来し、大中十三年ごろに筆写さ



れたとは考えられない。

「海鳥浮還没」詩は、唐代の長沙窯で制作された磁器に三例見られ、大中十三年に敦煌で筆写された「吉凶書儀」(P.2662)にその残句が見られることから、これは唐代、民間で流行していた詩句であると考えられる。作者についてはもはや不明だが、少なくとも詩後半の二句は賈島の作ではあり得ない。「海鳥浮還没」詩は唐代、広範に流行したゆえに、口誦・伝写が繰り返され、その結果、複数の異文が生じた。『長沙窯』圖四三八および圖版一九二には「掉穿波上月、舡壓水中天」とあり、この「波上」の系統のテキストが日本に伝来し、それに基づいて『土佐日記』の「掉は穿つ波の上の月を、船は庄ふ海の中の空を」が生まれ、『長沙窯』模圖四六一には「掉川波裏月、舡壓水中天」とあり、この「波裏」の系統のテキストに基づいて、高麗使・賈島「過海聯句」説話が作られた、と考えられるのである。『土佐日記』の、江戸期国学者による注も、二十世紀の国文学者による注も、一月十七日の條に詠じられる漢詩が高麗使・賈島「過海聯句」を出所とし、「昔の男」を賈島と見做す。そして、小西『評解』・萩谷『全注釈』は、「過海聯句」に「掉穿波底月」とあり、『土佐日記』では「底」が「ウへ」と言い換えられている問題について、検討を加えている。しかしながら、一九八三年に出土した長沙窯の磁器に「掉穿波上月」と書写されている以上、「底」↓「ウへ」については議論の必要がなくなつたと言えよう。また、「昔の男」を賈島とする注釈についても、再検討の必要がある。

### 三

高麗使・賈島「過海聯句」説話は、唐代に民間で広範囲に流行していた五言絶句のうち、前半を高麗使の作に、後

半を賈島の作に偽託したものである。もちろん、たとえ偽託にせよ、高麗使・賈島「過海聯句」説話が、紀貫之の時代（九世紀後半～一〇世紀前半）にすでに日本に伝来していたならば、「昔の男」は賈島ということになる。しかし、この説話が貫之の時代にすでに作られていて、しかも日本に伝来していたとは考えにくい。陳尚君「長沙窠唐詩書後」は、この「聯句」説話は宋人が賈島に偽託して作ったものと断定している。<sup>16</sup> 宋は九六〇年の建国、すなわち一〇世紀後半であり、この説話が生成してから日本に伝来するまでにはさらに時間がかかったであろう。

ではこの高麗使・賈島「過海聯句」説話はいつたいつ生成したのであろうか。この問題は賈島の後世における評価の高まりと関係する。賈島は若い頃、出家して僧となるが、張籍・韓愈の知遇を得て科挙に応じはじめ。元和五年（八〇九）、三十一歳のとき、進士科を受けるため都長安に上るが翌年落第、元和六年には韓愈に従って再度上京し、青龍寺に居した。この後、元和年間は一貫して長安に居住し、長慶二年（八二二）、四十四歳のとき進士科を受験するものの、作る詩が貴顕を批判するものであったため普段から貴顕から恨まれており、この時も「僻澁之才」（苦渋に満ちていてしかもひねくれている。『北夢瑣言』六十四のことば）ゆえにまたも退けられる。開成二年（八三七）に遂州長江縣の主簿に任ぜられるが、これも政争に巻き込まれたための処罰的措置であった。その後、地方の微官に任ぜられ、會昌三年（八四三）六十五歳で没した。このように賈島は不遇の人生を送った人物であるが、墓誌銘に「孤絶之句、記在人口」（卓越した詩句は、多くの人々に記憶され口ずさまれている）<sup>17</sup>とあるとおり、その文学は生前から高く評価されていたと認められる。しかし、この表現は墓誌銘であるゆえの褒辞であり、いささか割り引いて考えなければならぬ。実際には、賈島の詩名は彼の死後、すなわち晩唐期（九世紀後半～十世紀前半）になって非常に高まりを見せる。李知文「論賈島在唐詩發展史的地位」<sup>18</sup>に拠ると、賈島は晩唐詩人によって崇敬され、それは盛唐の杜

甫・李白、中唐の白居易・韓愈に肩を並べるほど、あるいはそれ以上であったという。例えば、晩唐期、杜甫を追慕し杜詩に唱和する詩は六首であるのに対して、賈島は三十八首の多きに至った。また、「元」辛文房『唐才子傳』巻七には、以下のような逸話が収められる。

李洞、字才江、雍州人、諸王之孫也。家貧、吟極苦至廢寢食。酷慕賈長江、遂銅鑄鳥像、戴之巾中、常持數珠念賈島佛一日千遍。人有喜島詩者、洞必手録島詩贈之丁寧再四、曰、「此無異佛經、歸焚香拜之。」其仰慕一何如是之切也。」(以下省略)<sup>19)</sup>

李洞(？～八九七?)、字は才江、雍州の人で、唐の宗室の後裔であった。家は貧しく苦吟を極めて寢食を廢するほどであった。賈島を酷愛し、賈島の銅像を鑄造して頭巾をかぶせ、いつも数珠を持って賈島仏の像の前で一日千遍(賈島の詩を)唱えた。賈島の詩を好む者がいたら、李洞は必ず何回も丁寧に賈島の詩を筆録してその人に贈り、「これは仏教の經典に異ならない。お香を焚いて拝みなさい」と言い添えた。その敬慕のさまはなんともこのようにまで切実であった。——この逸話の真偽については疑わしい点もあるが、晩唐詩人の賈島崇敬を象徴しているよう。

右以外にも、賈島にはその「苦吟」にまつわるもの、その卓越した詩才を示すものなど、さまざまな逸話が作られる。「推敲」などは、賈島の「苦吟」を象徴し、しかも韓愈との出会いを記す、最も人口に膾炙した故事であるものの、これは事実ではなく後人によって創作された「説話」(民間に伝わる話)であり、また、この「推敲」故事を記載するのが〔後蜀〕何光遠(九三六年ごろ在世)『鑿戒録』卷八「賈忤旨」<sup>20)</sup>であることには十分注意しなければならな

い。さらに、「宋」計有功『唐詩紀事』卷四十「賈島」に載せる逸話は、賈島の詩才を示すものである。

島爲僧時、洛陽令不許僧午後出寺。賈有詩云「不如牛與羊、猶得日暮歸。」韓愈惜其才、俾反俗應舉、貽其詩云、「孟郊死葬北邙山、日月星辰頓覺閑。天恐文章中斷絶、再生賈島在人間。」由是振名。或曰非退之詩。<sup>①</sup>

賈島が僧侶であった時、洛陽令は僧侶が午後に寺を出るのを許さなかった。賈島は詩を作りその詩に曰く、「牛と羊との、猶ほ日暮れて帰るを得たるに如かず。」韓愈はその才を惜しみ、還俗させて科擧に応じさせ、詩を贈った。その詩に曰く、「孟郊死して北邙山に葬られ、日月星辰頓に閑かなるを覺ゆ。天は文章半ばにして斷絶せるを恐れ、再び賈島を生じて人間に在らしむ。」と。これによって賈島の詩名は広くとどろいた。（或曰非退之詩）六文字は『唐詩紀事』の校記であり、「孟郊死葬北邙山」詩が韓愈の作ではない可能性を指摘している）——この逸話は賈島の詩才を示し、しかもそれが韓愈の賞賛を受け還俗する契機となったことを述べている。この逸話は内容があまりにも荒唐無稽であり事実とは認められず、「不如牛與羊、猶得日暮歸」の一聯も賈島の作ではないであろう。

高麗使・賈島「過海聯句」説話は、『唐詩紀事』所掲の「不如牛與羊」説話と同じ状況下で発生したものである。つまり、晩唐期、まず文人階層において賈島崇拜の傾向が高まったあと、その傾向が通俗文学受容層にまで波及し、「苦吟の詩僧」賈島のイメージが極端に増幅された結果、これら荒唐無稽で伝奇性の強い賈島説話が生成したと推測されるのである。その時期はどんなに早く見積もっても晩唐期であろう。筆者は五代（十世紀）以降のことと推測する。特に、「過海聯句」説話は、たとえ唐代に生成したと仮定するにしても晩唐期であることは疑いを容れず、文中に「高

麗使」とあるので、この説話が現在のかたちで筆録されたのは朝鮮半島に高麗が成立した十世紀以降と考えなければならぬ。

しかしながら、賈島の詩名は十世紀の日本にすでに伝わっていた。大江維時（八八八〜九六三）『千載佳句』には賈島に関連する詩句が三聯収められる。

〔雪〕

莫是上天宮裏唱 歌聲飄下玉梁塵 賈島〔驚雪〕<sup>(22)</sup>

〔才子〕

天恐文章中斷絶 再生賈島在人間 韓愈〔薦賈島〕

〔行旅〕

峯懸驛路殘雪斷 海浸城根老樹秋 賈島〔上韓湖州〕<sup>(23)</sup>

右の『千載佳句』本文は、金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集 句題和歌・千載佳句研究篇 増補版』（培風館、一九五五年）によって校訂されたものである。『千載佳句』は十世紀半ばごろの成立と考えられるので、時代は貫之<sup>(24)</sup>『土佐日記』のすぐあとである。賈島の詩は十世紀前半には日本に伝来していたのであり、これは晩唐期の賈島詩評価の高まりが影響したものである。賈島の詩が十世紀前半にすでに日本に伝来していたならば、高麗使・賈島〔過海聯句〕も日本に伝来していて貫之はそれを目にしていたとの推測も生まれるが、その可能性は低い。この問題を

考察する上でまず手がかりとなるのは、『千載佳句』の韓愈「薦賈島」詩である。国立歴史民俗博物館『千載佳句』は鎌倉時代の写本であり、現存する『千載佳句』のテキストとしては最も古いものに属する。ここでは「薦賈島」詩の作者が「白」、すなわち白居易となっており、韓愈の作とは特定されていない。この詩は、早くは、晩唐の韋莊（八三六～九一〇）が編んだ『又玄集』<sup>26</sup>に韓愈「贈賈島」として収録されているが、前に掲げた『唐詩紀事』の校語が示すように、偽作の疑いが濃厚である。おそらく中国で晩唐期の賈島詩評価の高まりを受けてまずこの詩が作られ、その後、韓愈の名が仮託されたうえで『唐詩紀事』所掲の「不如牛與羊」説話の後半部分を構成するかたちで追加されたと考えられる。この詩はおそらく作者名が記されぬまま日本に伝来し、日本ではまず平安期日本で圧倒的地位にあった「白」の名が追記されたのであろう。「推敲」故事にせよ、「不如牛與羊」説話にせよ、韓愈によって賈島が見いだされたというこれらの逸話は、晩唐期の賈島詩評価の高まりを受けて、その後には作られたものであり、しかも、『千載佳句』古抄本に「薦賈島」詩が韓愈の作と記されていない以上、『千載佳句』が編まれた時代に「不如牛與羊」説話もまた日本に伝わっていなかったと考えられる。大江維時が見たテキストは、『唐詩紀事』のように韓愈が賈島の詩才に驚嘆し賈島に詩贈ったというかたちでは筆録されていなかったであろう。これをさらに演繹的させると、高麗使・賈島「過海聯句」説話もまた貫之「土佐日記」の時代に日本に伝わることはなかったであろうと推測できる。

この推論は、『土佐日記』では「棹は穿つ波の上の月を」であったことと併せて考えると、その蓋然性はより高くなる。第（二）節で詳述したように、長沙窯出土の磁器唐詩では「棹穿波上月」と「棹穿波裏（底）月」の二系統のテキストがあった。『土佐日記』では「波の上」とある以上、貫之は前者のテキストを目にしていたものと考えられ、それとは別に、高麗使・賈島「過海聯句」説話が生成する過程で後者のテキストが取り入れられたものと考えられる。

貫之が目にしていたのは、高麗使・賈島「過海聯句」ではなく、唐代、磁器に書写され商品として流通するほど民間で広範に流行した、詠み人知らずの五言絶句であろう。

#### 四

宋代の類書『分門古今類事』卷十五「祥兆門」は「天聖高第」という標題で以下の逸話を収める。

天聖五年春、有二舉人閑行、建隆觀中相與語曰、「今歲高第是何人。」有二道士基於廡下、白髭者曰、「不難知之。」二生曰、「師豈有異乎。」曰、「無之。『棹穿波底月、寒壓水中天』、不離乎此也。」其年榜首王堯臣、小名越哥。次韓琦、次趙槩。月與越同、寒與韓同、天水則趙氏郡號也。再尋道士、不復見矣。『幕府燕間録』<sup>27)</sup>

——北宋的天聖五年（一〇二七）春、二人の挙人が散歩の途中、建隆觀で語らった。「今年は誰が科挙第一位で合格するだろうか。」建隆觀では庇のもとに二人の道士が碁を打っていた。白髭の方が言った。「それを知るのはたやすい。」挙人が言った。「師はなんと常人とは異なっていることよ。」白髭の道士が言った。「私は何も常人と異なることはない。『棹は穿つ波の底の月を、寒は壓ふ水の中の天を』、これに違うことはない。」その時の科挙第一位は王堯臣で、小名を越哥と言った。第二位は韓琦、第三位は趙槩であった。「月」は「越」と同音で、「寒」は「韓」と同音、「天水」は趙槩の郡号である。再び道士を訪ねたが、二度と現れることはなかった。（『幕府燕間録』による。）——この説話では、「棹穿波底月、船壓水中天」の「船」が「寒」に入れ替えられ、（姓が「寒」と同音の）韓琦は科挙の試験で

趙槩（天水）を圧倒することを予言する讖言として用いられている。これは、「海鳥浮還没」詩が高麗使・賈島「過海聯句」説話に取り入れられたのと全く同じ構造である。特に、「過海聯句」説話においては、「海鳥浮還没」詩の前半を高麗使が作りそれに続けて賈島が「棹穿波底月、船壓水中天」と続け、詩の巧みさで高麗使を圧倒したとある。確かにこの一聯は「棹が波間に動く月を突き刺し、船が海面に映る夜空を覆う」という機知に富んだ表現に成功している、作者を「苦吟の詩僧」賈島に仮託しようとするのも十分理解できる。この一聯は唐末期、「佳句」としての地位を獲得し広範に口誦・筆写され、その流伝の過程でさまざまな小説・筆記資料に出現することとなったのである。

「棹穿波底月、船壓水中天」は『水滸傳』にも出現する。第六十一回では、盧俊儀が呉用の策略によって梁山泊までおびき出され、宋江たちから梁山泊入りを強要される。その場から逃げ出した盧俊儀の前に、一人の漁師（実は李俊の扮装）が舟をこいで近づいてくる。

盧俊儀看見、仰天長嘆道、「是我不聽好人言、今日果有悽惶事。」正煩惱間、只見蘆葦裡面一個漁人、搖著一隻小船出來。正是、（盧俊儀、それを見て、天を仰いでためいきをつき、「よい人のことばを聞かなかったばかりに、きょうはやつぱりうろたえごとに出あった。」と思あぐねている折しも、蘆のなかから一人の漁師、一そうの小船をこぎながら出て来ました。これぞ、）

生涯臨野渡 生涯野の渡しに臨み

茅屋隱晴川 茅の屋かやは晴れたる川いへべに隠かくかなり

沽酒渾家樂 酒かを沽かいて漁家は樂しみ



看山滿意眼 山を看着意を満みわして眠る

棹穿波底月 棹は波の底の月を穿ち

船壓水中天 船は水の中の天を壓おす

驚起閒鷗鷺 閒まかなる鷗かもめと鷺さぎとを驚おどき起たたしめて

沖開柳岸煙 柳の岸の煙もを沖おき開く

那漁人倚定小船叫道、「客官好大膽。這是梁山泊出沒的去處、半夜三更、怎地來到這裡。」(かの漁師、小船を止めると、大声で、「旅の人、よくも大胆な。ここは梁山泊が出沒する場所だよ。この夜更けに、どうして着いたのか

ね。』<sup>(28)</sup>

漁師が舟を漕いで梁山泊に出沒するさまを詠う、この五言律詩の頷聯には、「棹穿波底月、船壓水中天」が用いられている。ここでは「波上」ではなく「波底」であることに注目すべきである。『水滸伝』の用例から、長い期間の口誦と伝写の過程で、「上」よりも口語の要素が強い「波底」の方が、テキストとして主流になっていたことを示唆するものである。

唐代、民間で広く流通した「海鳥浮還没」詩は、特に後半の「棹穿波上(底)月、船壓水中天」が佳句であるがゆえに、日本の紀貫之『土佐日記』にも採り入れられ、中国では晩唐以降、賈島評価が高まることよって「過海聯句」賈島の作として偽託され、また宋代には、科挙及第者を予言する讖言としても用いられ、さらには白話系通俗小説『水滸傳』にまで出現することとなったのである。

この小論を、白話系文学の研究に潜心された  
井上泰山先生に捧げる。

## 注

- (1) 『土佐日記』本文の表記は、新・日本古典文学大系『土佐日記』（長谷川政春校注、岩波書店）による。
- (2) 『土佐日記古註釈大成』所収、日本図書センター、一九七九年。
- (3) 『定家本土佐日記』、尊経閣叢刊、育徳財団、一九二八年。
- (4) 池田龜鑑『古典の批判的處置に關する研究』第三部「資料・年表・索引」、岩波書店、一九四二年。
- (5) 賈島の生没年と伝記については、黄鵬箋注『賈島詩集箋注』（巴蜀書社、二〇〇二年）の「賈島年譜」に従う。
- (6) 『苕溪漁隱叢話』の本文は、呉文治主編『宋詩話全編』（鳳凰出版社、二〇〇六年）に従う。同書第四卷三六四五頁。
- (7) 黄鵬箋注『賈島詩集箋注』（巴蜀書社、二〇〇二）所引。
- (8) 陳珏主編『唐代文史的新視野——以物質文化為主』（聯經出版、二〇一五年）所収。
- (9) 角川書店、一九六七年。
- (10) 注(8)所掲の陳尚君「從長沙窯瓷器題詩看唐詩在唐代下層社會的流行」による。
- (11) 紫禁城出版社、一九九六年。また、この「袖下褐衫」「海鳥浮還沒」「詩文壺」は李輝柄（主編）『長沙窯』（全三冊、湖南美術出版社、二〇〇四年）でも見ることができ。
- (12) 朱金城箋校『白居易集箋校』卷十七「律詩」、上海古籍出版社、一九八八年。朱金城はこの詩を元和十二（八一七）年、江州での作とする。
- (13) 『長沙窯』では「川」字を「以」と釈読するが、本稿では、徐俊「唐五代長沙窯瓷器題詩校證——以敦煌吐魯番寫本詩歌參校」が「以」實作「川」、爲「穿」字音近訛字」と指摘するのに従う。
- (14) 士禮居叢書景宋刊本『宣和遺事』前集に「宋江讀了、口中不説、心下思量、這四句分明是説了我裏姓名。」とある。
- (15) 徐俊『鳴沙習字集 敦煌吐魯番文学文献叢考』上冊所収、中華書局、二〇一七年。

- (16) 陳尚君『漢唐文學與文獻論考』所収、上海古籍出版社、二〇〇八年。
- (17) 蘇絳「唐故司倉參軍賈公墓銘」、『賈島詩集箋注』所収、注(7)参照。
- (18) 『文學遺產』一九八九年第五期所収。
- (19) 周紹良箋證『唐才子傳箋證』、中華書局、二〇一〇年。
- (20) 清知不足齋叢書本。
- (21) 王仲鏞著『唐詩紀事校箋』、巴蜀書社、一九八九年。なお、「或曰非退之詩」とあるのは『唐詩紀事』の校記であり、南宋・嘉定甲申(一二二四)に同書を刊刻した王禮が記したものである。
- (22) この詩句は、賈島の詩集『唐賈浪仙長江集』(四部叢書所収明翻宋本)には収められない。従って中国の地では失われた賈島の逸詩と考えられる。のち、市河寛齋『全唐詩逸』に収録された。
- (23) この詩句は、『唐賈浪仙長江集』巻九に七言律詩「寄韓潮州愈」の尾聯として収められる。
- (24) 藤原克己『菅原道真と平安朝漢文学』(東京大学出版会、二〇〇一年)による。
- (25) 『国立歴史民俗博物館蔵・貴重典籍叢書・文学篇』第二十一巻、臨川書店、二〇〇一年。
- (26) 傅璇琮編撰『唐人選唐詩新編』所収、陝西人民教育出版社、一九九六年。
- (27) 十萬卷樓叢書本。
- (28) 日本語訳は、清水茂訳『水滸伝』第九冊(岩波文庫、一九八三年)による。

